
平次のデートプラン

大阪花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平次のデートプラン

【Nコード】

N5322B

【作者名】

大阪花子

【あらすじ】

恋人同士になった平次と和葉は、初デートをする事に。平次が和葉のために考えたデートプランとは一体・・・？

『明日お前どうせ暇やる？オレがしゃーなしで遊びに連れてったるわ』

昨日の夜、オレが和葉に送ったメール。

『ホンマあんたは素直ちゃうなあ。しゃーないから平次のために時間作ったるわ』

メールを送って、すぐに返って来た和葉からの返事。

素直ちゃうんはお前や。

ホンマはヒマなくせに。

……って思ったけど、ここでケンカになったら明日ヒマなるから、約束だけ取り付けてメールを終わらせた。

明日、オレは和葉と付き合って初めて2人で遊びに行く。

そう、初デートや。

やからって、なんか変わるワケやないけど…

オレらに甘い展開を期待する方がおかしいやろ…

でも一応、デートプランは立ててある。

まあ、和葉のアホにはそんな事言ったらへんけどな。

和葉のことやから、今頃鼻歌でも歌いながら服選びしてんやろな！

「お父ちゃんゴメン！明日一緒に買い物行かれへんくなった！」

「なんでや？明日ヒマや言うてたやんけ」

せっかく平次から、デートのお誘いが来たのに、断る訳にはいかへん。

でも、”明日平次とデートやねん”やなんて、素直に言われへん…

「…平次君とどっか行くんか？」

「え！？なんで!？」

「お前、顔赤なつてんぞ？ホンマ分かりやすいなあ」

お父ちゃんはそう言つて、豪快に笑つた。

そしてその後、”楽しんで来いよ”つて言つてくれた。

「うん　ありがとうお父ちゃん」

アタシは顔をほんのり赤くして、観念したようにお父ちゃんにそう言つた。

明日は平次と付き合つて初めてのデート。

デートやからつて、なんもないやろうけど…

まあ、平次はアホやから、ただ遊びに行くつてくらいにしか考えてへんのやろうな。

でも、楽しみやなあ
なに着ていこう！

アタシは鼻歌まじりに服選びをした。

デート当日。

オレはバイクに乗って、和葉を迎えに行く。

そこで、和葉んちの前で、バイクのクラクションを鳴らして迎えに
来たことを伝える。

ガラッ

和葉んちの戸が開いて、出て来たのは…

「…お…オツチャン…」

「おはよう平次君。朝っぱらからそんな音出したら近所迷惑やろう」

「は、はい…すんません…あの、和葉ちゃん…居てはりますか？」

「和葉やったら、もう来るわ」

「そうですか…」

オツチャンがそう言った後、すぐに和葉が家から出て来た。

「平次、ごめんなあ！」

遅いんじゃないボケ！

何時間待たすんじゃない！！

いつもならこう言ってしまうオレも、オツチャンの前では恐ろしくて言われへん…

「全然待ってへんで？オレこそ朝早よおからごめんやで？」

オレはできる限りの笑顔で和葉に喋る。

…ちゃんと笑えてたかは別として…

「ほなお父ちゃん、行ってくるな！」

和葉は楽しそうに言ってから、オレのバイクの後ろにまたがった。

そしてオレにギュッと抱きついた。

その瞬間、オツチャンの眉毛がピクツと動いたのを、オレは見逃さなかった。

「か…和葉ちゃん？ちよっとくっ付きすぎちゃうか？」

「何言ってるよ。しっかり掴まっとけて、いつも平次が言ってるんやか！」

オツチャンの眉間にシワが寄る…

「…平次君…」

「は…はい？」

「バイクの運転は、気を付けるんやで？」

オツチャンは、オレの肩にポンと手を置いてそう言った。

肩に置かれた手えには、力がこもっていた。

「わ…ワカリマシタ…」

「平次早よバイク出して！」

「へいへい。…じゃあ、和葉ちゃん…お借りしますね？」

「おう。氣い付けてな…」

こうしてオレは、オツチャンから逃げるようにバイクを発進させた。

こんなくそ寒い日に乗るバイクほど、寒いモンはない。

平次に抱きついてるアタシがそう思うくらいやから、アタシの前で風を切ってる平次はもつと寒いんやろうな…

しゃーないから、アタシの温もりで背中くらいはあっためたるわ」

ぎゅっ

アタシは、自分の体を更に平次の背中に密着させた。

「和葉、寒いんか？」

赤信号の時、平次が頭をアタシの方に向けて、そう聞いて来た。

「なんで？」

「いや やたらくっ付いて来よるから…」

気のせいかなあ…

平次顔赤い？

ヘルメットでよう分からへんけど。

「アタシより平次の方が寒いやろ？やからあつためてあげてんねん」

アタシは笑顔でそう言って、平次の背中に顔をくつつけた。

ほんなら平次は、

「そりゃどうも」

って言うて顔を前に向けた。

何なん…

せっかく彼女が可愛い事言つたのに、ちよう愛想悪いんとちゃう!？

…なんやねん、この女は…

ちよいちよい可愛い事言いよる…

照れてる顔を見られたなくて、楽しそうに笑う和葉に適当に返事して前に向き直ったワケやけど…

和葉はご機嫌斜めになってしもたみたいや。

やって、オレの腹に回されとった和葉の腕の力が急に強なって、軽く息苦しくなったから。

お前は何年オレと一緒におんねん！

照れ隠しって事くらい気いつけや！

朝に出発してから、何時間経ったんやろか？

お日さんが沈みかけてる。

アタシらは、まだバイクに乗ってる。

お昼食べんのに、どっかのラーメン屋やに立ち寄ったけど、そんな時以外、平次はアタシを後ろに乗つけて、ずっとバイクを走らせてる。

絶対、ここ近畿地方ちゃうわ…

もしかして、ただバイク乗りたかっただけなんか！？

ええ加減、おしり痛なってくるわ…

「へーじー」

アタシはうなだれるように平次を呼ぶ。

でも、バイクの音がおつきいから、結構声を大にする。

「なんや？」

平次はバイクの運転に集中しながらも、アタシに返事を返してくれる。

「いつまでバイク乗ってるん？」

「あとちよつとや！」

…なにが”あとちよつと”や。

何時間か前にも似たような事言ってたやん！

「アタシおしり痛い」

「なんや？和葉痔か？」

「ちゃうわボケ！」

平次のボケに、アタシは怒りを込めてつつこんだ。

ほんなら平次は、ケタケタ笑った。

「ホンマにあとちょっとやから」

「ホンマ？」

「ホンマや！」

「…分かった…」

アタシはとりあえず、平次がどっかの目的地に向かってるって事が分かったから、おとなしくする事にした。

さっきまでやいやい言ってた和葉が急におとなしかった。

オレはとりあえず、空が暗くなって来てたから、運転に集中する事にした。

平次が”あとちょっと”って言うてから、ちょっと経って、なんか、山道をひたすら走ってる。

なんや日本一周でもするんか？

明日学校やで…

そんな事を考えてたら、バイクが止まった。

もしかして、道に迷ったとか？

アタシ目の前には、平次の背中越しに林が見える。

「和葉降りる。こっからちよつと歩くで」

歩く？

この林中を？

「なんでよ？」

まだ日いが沈みきってないっていうのに、林中は、真っ暗で…

平次はその林の前にバイクを停めた。

「ええもん見たるから」

そう言いなが、自分のヘルメットとアタシのヘルメットをバイクに引っ掛けた。

「…こんなとこにええもんなんかないって」

アタシはその林の中を歩くのが怖かったから、そう言ったのに、平次は…

「ええから付いて来いや!」

って言うて林の中に入って行く。

「えっ!?! ちょっ…」

しかも、アタシを引っ張って。

アタシの手えを握って、グイッと引っ張って…

アタシは平次のその行動に、勝手にときめいてるワケで…

平次はきつと なんとなく手え掴んだだけやろっけだな。

そんな事を考えてる間に、お日さんは完璧に沈んで、どっかいつてもうてた。

和葉を引っ張るといふ口実で、さりげなく手を握ったけど、やっぱり緊張するわ。

和葉が握り返して来たから余計に…

しかもその手え、めっちゃ冷たかって、ちょっと驚いた。

「平次？」

「なつ、なんや？」

林を抜けたところで、急に和葉が口を開いたから、ドキッとして、返事がしどろもどろになってもうた。

「ええもんって何なん？」

「いじやー！」

オレはそう言うて、前に向かって指を差した。

「…わぁ…！」

少し歩いて、林から抜けたら、そこだけ木が生えてないところがあるんや。

そこはめっちゃ夜景がキレイやねんけど…

「めっちゃキレイや…平次、わざわざこれ見せるために大阪から？」

…オレが和葉に見せたかったんは、それやなくて…

「アホか！夜景やったら通天閣で見れるやろ！？」

「じゃあ何なんよ！？」

「上見てみい」

「上？」

和葉は意味分からんて言う目をしながら、空を見上げる。

その瞬間、目を見開いて微笑んだ。

「うわぁ…！スゴイ、めっちゃキレイ…」

「やる？」

オレが和葉に見せたかったんは、大阪やったら見られへん、満天の星やった。

この前、テレビ見とって、和葉が、

『一編でええから、こんなキレイな星空、生で見たいなあ』

って呟いたんを覚えとって、バイクであちこち走りまわってやっと見つけた場所やった。

和葉は目をキラキラさせながら星空を見つめてた。

オレも、最初は星を見とったけど、いつの間にか、星空に見とれる和葉に見とれとった。

アタシは、こんないっぱい星見んのは、生まれて初めてやった…

なんか、おしり痛いのか、寒いのか忘れてまう。

でも、アタシの手えから伝わってくる平次の温もりだけは、忘れてなかった。

ちよつと首が痛なって、平次の方を向いたら、一瞬目が合って、でも平次はすぐ目を逸らした。

でもすぐに視線がアタシんところに帰って来た。

「平次ありがとうな！」

アタシは、自然に出て来たどびつきりの笑顔で、平次にお礼を言うた。

ガバッ

「きゃっ」

和葉のその笑顔が、なんや堪らんかって、心がキューンとなって、オレは気付いたら和葉を抱きしめてた。

「へ、平次！？」

和葉はめっちゃ驚いてる様子で、でも嫌がる素振りは見せへんくて、オレも和葉を離す気はなかって…

どないしよう…

めっちゃドキドキするんやけど…

オレは、とにかく必死に脳みそフル回転させて、言い訳を考えとった。

いきなり平次に抱き寄せられて、アタシの顔は、平次の胸元にあった。

バイクに乗って、アタシから平次に（仕方なく）抱きつく事はあっても、面と向かって、しかも平次から抱きしめてくるやなんて、初めてやった。

どないしよう…

アタシ、めっちゃドキドキするんやけど…

「か…和葉…」

「…なに？」

平次の腕の中で自分の名前を呼ばれて、アタシの心臓…破裂寸前や。

「あの、あれや…バイク乗ってる時あっためてくれたやろ？そつ、それのお返しや！」

「うん…ありがとう…」

アタシが素直にそう言つと、平次の腕の力がちよつと強くなった。

やって、お返しでも何でも、嬉しかつてんもん。

平次の心臓が、アタシに負けへんくらいバクバク鳴ってたんが…

今度は手えやなくて、体全体で平次の温もりを、心に染みるくらいに感じた。

オレは、しばらく和葉を抱きしめとった。

でも、いつまでもそうしてるわけにはいかん。

名残惜しかったけど、和葉を体からゆっくり離れた。

「和葉、そろそろ帰らな」

「せやね！明日も学校やもんな！」

心なしか、和葉の顔が寂しそうに見えた。

そりゃあオレも、もうちょい甘い時間を楽しみたかったけど…

「…また、この林ん中通って帰るんやね…」

「いけるって。ほれ」

オレは暗闇にびびってる和葉の手を握る。

「これやったら怖ないやろ？」

「ん…ビミョー…」

「ビミョーて何やねん!？」

この女は…ホンマ素直ちゃうなあ。

まあええわ。

和葉なりの照れ隠しって事で許したろ！

オレと和葉は、手を繋いで元来た道(?)を帰る。

“明日も学校やもんな”

オレの頭ン中で、和葉が言った言葉が思い出される。

朝っぱらから、1日掛けて来たこの場所。

って事は、帰んのにも、おんなじ位時間が掛かるワケで…

ケータイを見ると、今の時間は… 21時 ちょっと過ぎ…

オマケに圏外。

オレとしたことが、帰りの事を全く考えてなかった。

学校を休むのはええとして、問題は和葉のオトン。

このまま大阪に帰って、オレは今まで通りに生きて行けるんやろうか…

大阪に帰ってからの事を想像したら、オレの顔から、血の気が引いた。

「平次どうしたん？なんか様子おかしいで？」

「和葉… オレ、まだ遺書書いてない…」

「はあ！？」

おわり

（後書き）

こんにちは。大阪花子です（＾＾）

今回は、甘い話を目指して書いてみました。
2人の視点で書くのが思ったより大変で…。

大阪に帰ってから、平次がどうなったかは、読者の皆様のご想像に
お任せします（笑）
冬のバイクは本当に寒いです…

一言でも感想などいただけると嬉しいです（*^^*）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5322b/>

平次のデートプラン

2010年12月30日14時30分発行